
目深帽子のその奥に

黒猫さんば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田深帽子のその奥に

【Zコード】

Z5291A

【作者名】

黒猫さんば

【あらすじ】

乙川姫乃16歳。バレーボールの全国大会まであと一勝と迫った時、彼女に悲劇が襲つた。左膝の骨折 入院する事になった姫乃是、そこで少年と出会う。似合わない帽子をいつもかぶっている口の悪い少年だった。

カツツカツツ……コツコツ……

不規則な音は、病院のドコか淋しい廊下に響きます。

松葉杖の使い方がギコチナイのは、私が入院してからまだ日が浅いからです。

私は、乙川 姫乃。『姫乃』っていう名前はなかなか気に入ります。

つい最近まで元気に暮らしていたのですが……

私の不注意で入院するハメになつてしましました

一日前、

『姫乃……ちょっと体調悪いんじゃない?』 友人Aこと、水谷真冬がいつも“おつとりボイス”に警告の意を含ませていることに私は気付いていました。

しかし!!

我がバレー部の全国大会を賭けた一戦を控えし今、体調不良くらいで休むことは出来ません。

『真冬、ありがとう。でも大丈夫!私は“全国”行くまでくたばらないから』

『そう?なら良いんだけど……』

真冬はまだ何か言いたげでしたが、私の決意に圧倒(?)されたのか、心配そうな顔で見つめるだけでした。

ああ……今思えば、なんである時真冬の忠告を聞き入れなかつたんだろう……

女子にしては身長の高い私は、バレー部においてはまさに無敵でした。

自分で言つのも難ですが、私の高い砲台から打ち出されるボール

は、人間のスパイクとは思えない威力で相手を弾き飛ばすのです。今回の試合でもスタメンとして起用されることになつていたので、練習にもよりいつそう力が入ります。

しかし、

真冬の言つたことも正しいのでした。

この日の私は、16年的人生で類をみない“絶不調”だったのです。

いつもの私なら、何かしら理由や言い訳をして帰つては必ずでした……

『もう一本！』

私が叫ぶと、一年生がトスを上げてくれました。

タツ、タツ、タンツ！

リズミカルに助走をつけたあと、タイミングを合わせてジャンプしました。

しかし

私は上げられたボールを空振り、バランスを崩して落下しました。ただ“落ちた”的なら、笑つて頭を掻いとけば問題なかつたでしょう。

『姫乃！！』

真冬の一言は、シンプルかつ的確に私の危険を察知していました。私は、いつの間にか足下に転がっていたボールの上に着地したのです。

皆さんご存じのように、ボールは丸いのです！転がるのです！左足を伝わって、白いバレーボールに私の全体重がかかりました。視界がサカサになつたのは、それから半秒後でした。

空中で横に一回転した私は、左半身を体育館の冷たい床に叩きつけました。

『ツ！！』

あまりに強く全身を打つたため呼吸が出来ず、半端なうめき声をあげてしまいました。

(あちやあ……恥ずかしいな。)

私は一刻も早く立ち上がり、『ああ、痛かった』と言いながら強がりたかったのですが

起き上がろうとした私を、真冬が片手で制しました。

真冬は妙に蒼白い顔で、私の膝の前辺りを見下ろしていました。ふと、私はその視線の先を追うとそこにはあつてはならない物があつたのです。

私の背中側に曲がるはずの左足が、なんとその爪先を顔に近付けんばかりに折れ曲がっていたのです。

『……折れてるよ。姫乃』

真冬の一言は、私にもわかつていたことでしたが、あまりに突然の出来事に私の思考回路はオーバーヒート、オーバーラップ、オーバーザレインボーなのでした。

『足？……折れた？……嘘だよね？……全国は？……私のせいだ……』
私の周りには練習中の悲劇に気付いた部員たちが、輪を作っていました。

受け入れられない現実は、夢のなかでは感じることの出来ないものによつて突きつけられました。

『……痛ツ！…』

左足に今まで味わつたことのない痛みが走りました。
チクチクやズキズキといった擬音では表現出来ない痛みに、私の視界が白くボヤけ

私は気を失いました。

目が覚めたのは、薬品の香る病院の一室でした。

既に処置はされていて、あの時に感じた痛みはもうありませんでした。

ベッドの上でボーッとしていると、不意にドアがノックされました。

た。

『……どうぞ』

入ってきたのは母親と体格の良い医者でした。

『気分はどうだい?』

大きな体に不釣り合いな高い声は、無邪氣で人なつっこい印象を受けました。

『……良いです』

嘘です。最悪です。

しかし

最悪なのは心の方であって、身体的には足が固定されているという以外、なんの不具合もありませんでした。

『そうかあ、じゃあまだ手術は出来ないね。僕は君の執刀医の河本です。よろしく』

『よ、宜しくお願ひします』

さつきの会話ド「かおかしくなかつたかな?

元気なのに手術が出来ない?やはりおかしいです。

私の不思議そうな顔に気付いたのか、河本先生が口を開きました。

『姫乃さん、実は“水ぼうそう”に感染しているようなんです。気付かないまま全身麻酔をかけると、気道にできたブツブツのせいで呼吸困難になる場合があるんだ』

河本先生が言うには、私の膝は関節の中の骨が砕け、飛び散っているそうです。

すぐにでも手術をしたいのですが。

私の体調が良いということは、まだ“水ぼうそう”が本気を出しえていない（先生は別の言葉を使っていたけど……）からなんだそうです。

先生は困ったように笑っていましたが、

お大事に。と言い置いて、トボトボ出ていきました。
これが私の入院生活の始まりだったのです。

左足に重いギプスを付けたまま、右足と妙な杖で歩くのは、なかなか困難です。

エレベーターまでの道のりを、ヨイシヨヨイショと歩いていきます。

私の病室は、“水ぼうそう”的感染を警戒して、個室だったのですが……

横長な形のこの病院は、西の端に『個室』、東の端に『エレベーター』という構図になっていたのです。

足を怪我した私には、あまりにもヒドイ仕打ちなのでした……長い道のりを踏破した私は、一度よく止まっていたエレベーターに乗り込みました。

先に乗っていた看護婦さんの「何階ですか？」の問いに、荒い息を抑え、「一階です」と答えました。

私がここまで必死に一階を目指す理由は、ただ一つ 瞬瀕しです。

病院というのは不思議なもので、何をしていても、ベッドの上にいるだけで時の流れが遅くなるのです。

私はもともと、ジッとしているのが苦手なのでとてもイライラしていました。

そんな私の気持ちを察してか、河本先生が松葉杖を貸してくれました。昨日、その杖にすがりついて歩いた結果 ロビーで外来患者を観察することが一番楽しいと判明しました。

不謹慎な暇潰しに思われますが、これがなかなか楽しいのです。

エレベーターが機械的な女性の声で、『2カイデス』と告げました。

看護婦さんの笑顔に軽く会釈を返すと、ロビーへと歩を進めました。

た。

平日だというのにロビーには人が「うじや」「うじやいました。
」の病院は県内でもなかなか有名で、なにより“大きい”のです。

入院三田田の新米患者が歩き回ると、たちまち迷ってしまうほど、危険な広さなのです。

ちなみに、その新米患者とは私のことです……

私は昨日来たときと同じ、入り口に一番近い長椅子に座りました。人の流れがせわしなく行き来するたび、自動ドアから五月のうらかな風が吹き込んできます。

私は、普段読みもしないファッショソ誌を手にとると、その陰から人間観察を始めました。

皮膚科の受付にいるオバサン……眼鏡のセンス悪いなあ。メガネザルに選んでもらつた方がまだキュートだよ

売店にいるオジサン……なんでネクタイをYシャツの中に入れているの?自分を貫くのも良いことかもしれないけど、たまには周りの目にも気を配つた方が良いかもよ?

真に失礼な感想が次々に沸いてくるのだから、私はつくづく自分の性格が嫌になります。

しかし、

それを大いに楽しんでいる自分がいることも、また事実だったのです……

長靴にジャージを入れたお兄さんをひとしきり罵倒しきった時入り口を挟んだ反対側に、クスクス笑いが見えました。

黒い野球帽を田深にかぶつて笑つている田は、確実に私に向かっているのです。

私はなんだか腹立たしくなつて、松葉杖をひツ掴むと田深帽子の前に歩み寄つたのです。

『な、何笑つてんのよ』

田深帽子はまだクスクス笑いを止めませんでした。
しかし、私の足を見ると、少しふックリしてからポンポンと自分の隣を叩きました。

私はまだクスクス笑いが釈にさわつていましたが、意外と素直に腰を下ろしました。

『で、なんで笑つてんのよ?』『君、気付いてないのか?』

『気付くつて。何に?』

私がキヨトンとした表情でさつ聞くと、田深帽子は私の頭のてっぺんを指さしました。

もちろんクスクス笑いながら

『寝癖。可愛いよ』

彼はそう言つたあと、ついに声をあげて笑いだしました。

私はというと、すぐさまロビーの壁に据えつけられた全身鏡で髪の毛の行方を確認しました。

私の黒髪のてっぺんには、一本の毛束が左右にピロッピロッと跳ねていたのです。

さながらそれは、某猫型ロボットの未来アイテム“頭頂部装着式回転翼”に酷似していました。

『君、面白いよ』

視線を彼に戻すと、大きいまんまるな目がこちらをのぞいていました。

頬が熱くなつた気がしますが、これは寝癖をからかわれた“怒り”からではないようでした。

私が黙つてつ立つていると、と、まんまる田玉はさつきのようにポンポンと椅子を叩きました。

『君、入院?』

私がいかにも渋々座る様子を見終えたあと、彼が訊いてきました。

『まあね。アンタは……お見舞い？』

『まあ、そんなとこかな』

彼の来ている服は、上から野球帽、ジャケット、パーカー、余裕のあるジーパンでした。

普通、入院患者はパジャマ以外の衣服を許されません。良くてジヤージでしょう。

彼の格好は“外来患者”もしくは“見舞い”以外考えられませんでした。

『しかしながら、入院中でもみだしなみ位は氣い使えよな』

『う、うるさいわねえ！余計なお世話でしょー。』

言いつつも、私はさつき手櫛した辺りをまた撫でつけていました。私は妙に悔しくなつてきて、奴の弱点を探すことになりました。もともと私は、人の欠点を探すことにだけには長けていました。こいつの弱点もすぐ見つけてやるつもりです。

“姫乃EYES”始動！

（注：“姫乃EYES”とは、人間觀察をしている私の姿を見た真冬が、

『姫乃……目の色がオカシイよ……』と恐れた事から名前がつけられた“神器”的一つです）

顔立ちは、まあ中の上つて位？ 大きな目にかかりそうな黒髪は、ほどよい長さで保たれている。すこく細身だけど、必要な分の筋肉はかね備えている。衣服もとても似合つていて、正直な話カッコイイ……

ここまでだと私の敗北は日に見えていくように聞こえるでしょう。しかし！

私は見つけたのです、彼のウイークポイントを。

それは

『アンタこそ、なんでそんな似合わない帽子かぶつてんのよ』 彼

はこきなり迎え撃つてきた私の反撃に、予想以上の反応を見せました。

『えー？ そ……そんなことどうでも良いだろーー！』

『よくないね。私の寝癖さんざんにじつといて、文句言わせないわよー。』

『 お。 そろそろ面会時間だーじゃなつ……』

『あ、ズルイ！逃げるなあー！』

彼は帽子をよういつそう深くかぶると、私に追い付かれまいと速足で逃げていきました。

これが、彼との最初の出会いなのでした

受傷後4日目

ナシワシの襲撃（前書き）

前書きの書き方がわからず、三話でやっと書けました…
はじめまして。黒猫さんばと申します。
この小説が初の投稿作品になります。
未熟なところだけかもしだせませんが、『』を読んただけたら嬉しく
いがぎりです。

それは突然私に襲いかかってきました……

『その歳になつて“水ぼうそう”かよ』

田深帽子が笑っている。なんだか、こいつに笑われると腹が立ちます！

しかし……

こいつの言ひ通り、“水ぼうそう”が発症したのでした

今朝、

私は院内の騒がしい音で目が覚めました。

昨日は田深帽子との一件のせいでのなかなか寝つけませんでした。奴に対する“怒り”やら“憎しみ”やら“悔しさ”が溢れてくるのででした。

しかし、

何故か彼が気になるのも、事実……かな？

私は腕を組むため、右手左手双方を互いの上に乗せました。

すると、妙な感触！

いつものスベスベ肌は何処へやら、両腕の表面に赤い発疹がいくつも

『なんじゃこりゃあああああ～～！！』

河本先生の診断はもちろん“水ぼうそう”でした。

熱とかも出るやつですが、言われてみれば確かに熱っぽいかも……しかし、

ブツブツと微熱以外の症状はなかつたので、昨日と同じくロビーへ向かいました。

松葉杖の扱いにも慣れてきたのか、思いのほか早く一階ロビーまでたどり着けました。

私がここに来た理由は、先日とは違います

今回の訪問の理由はリベンジ！

ロビーは、あの帽子男との報復戦を挑める唯一の場所なのですから！

なにせ、私は彼の名前を知りません。それどころか、年齢・住んでるトコ・誰の見舞いか・座右の銘etc……何一つ知らないのです。

つまり！

彼に再会するためには、ここで張り込むのがベターダと考えたのです。

アッシュを見つけるのに何日かかるかな？　という心配は、私の杞憂に終わりました。

(　いた！)

忘れもしないあの帽子。

昨日と全く違う服装にも関わらず、野球帽は昨日と同じようにスッポリと彼の頭を覆っていました。

目深帽子は本を読んでいました。昨日私が座っていた長椅子で……

その姿からは妙な大人っぽさが滲んでいるようでした。いや、実際滲んでたのかも

私は彼から発生している“近付きがたいオーラ”を松葉杖で払い除け、ずんっと歩みでました。

『やあ、寝癖女』

彼は顔を上げると、私を認識し、そして挨拶ならぬ挨拶をしまし

た。

私はムツとしましたが、しかしにも“武器”があることを思いだし攻勢に出ます。

『やあ、田深帽子君』

彼はニヤニヤしていた顔を、急にドキッさせました。
(やつぱり気にしてんだ。ダメージ大かな?)

私はなんだか満足したので、彼の隣に自分から座りました。

『来ると思った』

『え なにが?』

急に喋りだした帽子は、そのなかのまんまる目玉をじゅうに向けています。

私は先程の余韻に浸っていたせいで不意を突かれ、マヌケな声色を出してしまいました。

『人の話はしつかり聞きたまえ。なにがって、オマエに決まつてえうえええ!ど、どどどっしたんだその腕!?!』

彼が大声を出したので、自然と視線が私たちに集まります。彼の驚き方は、もう尋常じゃありませんでした。

壊れたクルミ割り人形のように口をパクパクさせています。あまりに愉快だったので、そのまま保存したかった位です。

『いや、ただの“水ぼうそつ”だから……』

『へ?』

半開きの口を直してやろうと、事実を説明したのがいけませんでした。

した。

しかし、

氣付いたときには後の祭り……彼は笑いしていました。そして、

あの言葉

『その歳になつて“水ぼうそつ”かよ』

しかし、

私は妙な感覚に包まれていました。

確かに、彼への“怒り”は感じているのですが、ドコか引っ掛け

るところがあるのです。

なんだかう……

『なあ、お前の病室何処だ?』

私がボオーッとしていると、彼が尋ねてきました。当然、ひとり笑つたあと……

『五階の一番奥の部屋だけ……なんド?』

『いやな、オマエ足怪我してるから、わざわざロビーまで来るの大変じゃないかと思つて』

『思つて?』

私は更に続きをあるよひつな気がして、いや、続きを期待して訊き返しました。

『えつとだな、オマエが大変だと思つて……み、見舞い。そう、見舞いに行つてやううと思つたんだ』

うつ向きかげんの田深帽子の下から、そんな言葉が聞こえてきました。

『わ、私は。別にアンタに会いにここに来たんじゃないわよ……』
彼の言葉に喜んでいる自分がいる、だけど、彼にはなんだか悟りました。あつまらせんでした。

私の返答を聞いた彼は、なんだかシコソン……つとしていました。
もちろん、この返答には続きがあります

『アンタがどうしてもつて言つなら。お見舞いされても良いわよ』

『……お見舞いされてもつてなんだよ』

彼は的確なツッコミをしつつも、ニヤニヤ笑つていました。
たぶん私も笑つていたと思います……

彼はチラッと時計を確認しました。

『……! ヤバつ……もう行かなきやー。じゃな、またあし……明後日』

『うん。じゃあ』

私は彼に手を振つていました。

更新が遅くなってしまいすみません；；
黒猫さんばです。

なんだか、スボ根ですが良かつたら読んでくださいw

それと、読んでいただけたら是非、足跡を残してもらえるとありがたいです。

批評なども宜しくお願ひします。

今日はバレー・ボール部の試合があります。全国大会への切符を賭けた大事な試合です。出場はもちろん、応援にすら行けない私は、ベッドの中ひたすら祈るしかありません。

チームの中核を担つていた私が抜けた今、勝てる見込みはフイフティファイフティか……自惚れ屋でスイマセン……とにかく、私にはみんなの勝利を願つて“待つ”ことしかできないのです。

それにしても、田深帽子はなんで今日ではなく明日来ると言い残したのか……何か大事な用事でもあつたのか……

ああ……イケナイイケナイ。真冬たちの勝利を祈るはずが、なん

でアイツの話になるんだ……

アイツが気になるから?いや、それはない!無い!絶対無い!うん。

でも……

『なにがって、オマエに決まって』

アレは嬉しかった……かな?

乙川 姫乃16歳。青春真っ只中。一人悶々とするのであつた!

両チーム2セット」と取り、ゲームはこの最終セットに託されました。

私、水谷 真冬は今、そのコートの中に立っています。

第5セットは先に15点先取したチームの勝利になります。

私達県立O高校は、私立K女子高に13対14と大ピンチです!次のボールが私達の陣営に落ちた瞬間、敗北……全国への道が閉

ざされます。相手チームのサーブ、ボールは低い弾道を保ちネットをかすめながら向かつてきました。

落下点は無人。まさに神業的サーブでした。

(落ちないでえ！－)

私の祈りを嘲笑うかのように、ボールは地面に接近していきます。しかし！

その時、ボールは高く跳ね上りました。

ボールをすくいあげたのは一年生のルーキーでした。練習のとき、とても苦手だと言っていたレシーブを……しかもこの土壇場で……

彼女の目は、まだ闘う目でした。

私は彼女の、みんなの繋げてくれた思いをネット前に上げました。身長の低い私には、得点を狙うことはとても難しいです。しかし、

トスを上げて、みんなをサポートすることは出来ます！

私が上げたボールは、姫乃の代わりに入った先輩によつて敵陣地を撃ち滅ぼしました。

14対14。ここからは先に一点取つた方が勝利です。

私は負けるわけにはいきませんでした。

いえ、私は負けても良かつたのです……

だけど、

姫乃のために負けるわけにはいかない

人一倍練習して、嫌なことも進んでやつて、あんなに頑張つていた姫乃の努力に報いるため、私は負けるわけにはいきませんでした。こちらのサーブです。弧を描いたボールは敵地に向かっていきます。

しかし、

相手チームの一人がそれを軽々とネット前に上げると
ダントン！－！

速攻です。

ボールは無情にも私達の陣営に大きな音を立てて跳ね回りました。
もう、後がありません。

周りの歓声がとても小さく聞こえます。

聞こえる……いや、感じるのは私の心臓の音と息遣い……

私はある歌を思い出していました。

どんな人でも、人生に一度はスポットライトを浴びる日がくる
んだ

ホントでした。地味で地味で地味な私だけど、こんなに鼓動の高
ぶる舞台に立っているんです。

最後まで諦めない！

相手チームのサーブです。緊張しているのか、深呼吸を繰り返し
ています。

最後に大きく息を吸い、彼女はボールを投げ上げました。

私たちが身構えると同時に、彼女の右手がボールを打ちました。

ボールはかなりの速さでネットを越えてきました。

あの状況下であれだけのサーブを打てるなんて……すごい精神力
です。

スピードを威力に変換したボールは、先程のルーキーを狙いました。

ルーキーはなんとかボールに触れました。

しかし、

ボールは絶望の淵……コート外へと弾かれました。

その時、誰もが思つたでしょう

(ああ、終わったな。)

と。

しかし！

私は違いました！

負けるわけにはいかないのです！

私は飛込みました。

コート外へと落下していくボールに……

（間に合えええ！！）

私の右手。迫る地面。

三十センチ。二十センチ。十センチ。

どんな人でも、人生に一度はスポットライトを浴びる日がくる
んだ

最後まで諦めない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5291a/>

目深帽子のその奥に

2010年10月10日00時01分発行